

増殖生命科学科

学科の
詳しい情報
>>>>



チョウザメ、ティラピア、サケ・マス、ヒラメ・カレイ、ウナギ、ウニ、アマノリ、コンブ
海洋微生物生態、魚病防疫、組織工学、再生医療、ホルモン内分泌、魚の卵形成
環境と生殖、免疫化学、比較繁殖生理学、バイオテクノロジー、発生工学
ジーンバンク、人工授精、性分化と統御、メタゲノム、バイオエネルギー
マリンエンザイム、海藻多糖、タンパク質工学



生命に迫る

将来、私たちにとって十分な食料を得るためには、おいしくて健康にいい魚・貝類や藻類を網いけすなどで大きく育てる「養殖」や、魚・貝類の子どもを海に放流し資源を増大させる「増殖」が必要不可欠です。そのため、さまざまな海洋生物の代謝や成長、繁殖、遺伝、各種酵素やホルモン、魚・貝類や藻類の病原菌やウイルス、海洋性細菌に関する基礎知識を身につけます。そして、遺伝子組換え技術、受精卵操作、ゲノム解析、ゲノム編集などの最先端の生命科学を学び、それらを十分に活かして、次世代の人々を豊かにする水産増養殖の分野で幅広く活躍できる人材を養成します。



増殖生命科学科卒・修士課程2年
坂上 美卯

学生の声

「増殖生命」と聞くと魚などの増養殖の研究をしているイメージが強いかもしれませんが、それだけではありません。私はコンブやワカメに含まれるネバネバ成分のアルギン酸に関する酵素の研究をしています。この研究が進めば、有効な治療法が確立されていない難病の薬として応用できる可能性があります。増殖生命科学科では、生命科学に関する最先端の知識と技術を学び、生物を細胞・分子レベルで理解し、有効利用するための研究を行っています。皆さんもミクロな視点から海洋生物の謎に迫り、新たな可能性を見つけてみませんか？

● 研究室の紹介

海洋微生物学

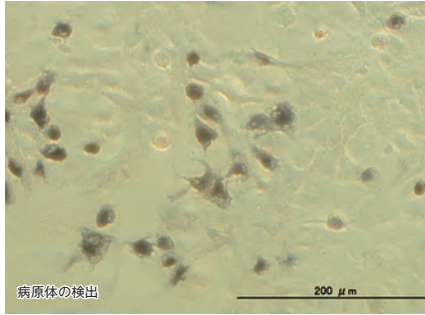
教員：澤辺・美野



海洋環境に棲息する微生物の性質や生態、生物間相互作用に焦点を当て、熱水噴出孔など極限環境の微生物の生理生態や、海洋微生物を利用した海洋バイオマスのエネルギー変換技術を構築するためのマリンバイオテクノロジー研究を行っています。

海洋生物防疫学

教員：笠井(久)・永田



魚介類を産業として飼育すると、病気の問題は避けて通れません。魚類ウイルス病および細菌病を主な対象として、魚病の診断、病原体の新規検出、防疫対策について研究しています。

生体高分子化学

教員：井上



コンブのネバネバ成分を分解する高機能酵素

ゲノムや遺伝子を調べることは容易になってきましたが、未知のタンパク質の機能を塩基配列から知ることはできません。解決策は、実際にタンパク質を使って詳細に機能を調べることです。海洋生物のユニークな生命現象をタンパク質の分子レベルから理解し、その有効利用を目指した研究を進めています。

海洋動物生化学

教員：東藤・平松



「生殖」は、生物に必須の生命現象で、魚類は極めて多様な生殖様式を持っています。魚の生殖に関する分子メカニズムを、遺伝子工学(組換え・ゲノム編集)・生物情報科学・生化学・組織学といった技術を用い研究しています。研究成果は、サーモンや海産魚の生産技術開発などに応用し、最近では餌の開発にも取り組みはじめました。

海洋動物生理学

教員：都木・浦



日本、世界各地で「磯焼け」と呼ばれる「藻場」が消失した海域が拡大しています。「藻場」の再生を目指し、駆除したウニを商品化するための養殖技術を開発しています。そのためにウニ生殖巣の肥大機構を組織学・生化学・遺伝子工学などの手法を用いて解明しています。その他にナマコなど海産無脊椎動物の生理学を研究しています。

海洋動物生殖学

教員：井尻



通称「淡水増殖研究室」です。ウナギやチョウザメなどの絶滅危惧種を人工繁殖するために、性分化・卵成熟・排卵のメカニズムを調べ、性統御、人為的成熟誘導、良質卵作出の技術を開発しています。より深く、生殖腺の性分化・性成熟を制御するホルモン産生機構を遺伝子発現調節のレベルからも調べています。

海洋動物育種学

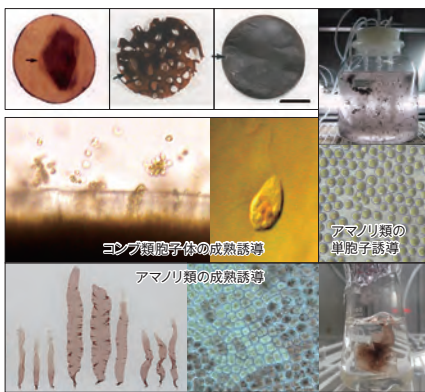
教員：藤本・西村



水産増殖と育種ならびに遺伝資源保全の原理的技術基盤となる、魚類の発生生物学と遺伝学に関する研究を分子・細胞から集団レベルまで多角的に行っています。

海洋植物学

教員：水田・宇治



水産増殖の発展を目的とした海洋植物(アマリ類などの紅藻やコンブなどの褐藻)の持続的な生産・繁殖に関わる生理・保存・育種に関わる生物学と技術開発に関する研究を行っています。

